

チュルク諸語の類型論を視野に入れた

エスキシェヒル・カラチャイ語の名詞述語文の構造の記述

藤家洋昭 (大阪大学)

Okan Haluk AKBAY (セルチュク大学)

菅沼健太郎 (九州大学)

1. はじめに

エスキシェヒル・カラチャイ語は、トルコ共和国のエスキシェヒル県で話されている、チュルク諸語のひとつである。

チュルク諸語の分類基準に用いられる語の一つである「山」を表す語が "tav" あることなど、チュルク諸語の中ではカザフ語などが属するいわゆるキプチャクグループに属していると考えられる。この点で、チュルク諸語のオグスグループに属するトルコ語とはやや遠い関係にある。先行研究^[1]によれば、エスキシェヒル・カラチャイ語は母語話者が減少していて、消滅の危機にあるという。また、エスキシェヒル・カラチャイ語の研究は、これまでほとんど行われておらず、早急な記述研究が求められる。そのような中で、本研究ではエスキシェヒル・カラチャイ語の名詞述語文を取り上げ、記述する。本研究でとりあげる、文としては比較的単純な構造を持つと考えられるような、名詞述語文についても、これまで全くといっていいほど分析されておらず、詳しいことはよくわかっていない。

名詞述語文とは、実質的に名詞が文の述語になっているものである。実質的にと言うのは、言語によっては、名詞そのものは文法的に述語になることができず、いわゆるコンピュータのようなものの助けを必要とするものがあるという意味である。後に詳しく見るが、エスキシェヒル・カラチャイ語と同じくチュルク

諸語のひとつである、トルコ語やウイグル語では、名詞は他の要素の助けを借りることなくそのまま文の述語になることができる。エスキシェヒル・カラチャイ語がこの点でどうなっているのか、詳しい記述と分析はない。そこで、本研究ではまず、エスキシェヒル・カラチャイ語の名詞述語文を記述し、そしてチュルク諸語の類型論にもとづいて議論する。その結果、エスキシェヒル・カラチャイ語の名詞述語文は他のチュルク語の名詞述語文と異なる構造を持つことを主張する。

2. 基本データ

エスキシェヒル・カラチャイ語は、いわゆる無文字言語で、エスキシェヒル・カラチャイ語による出版活動や識字教育は行われていない。本研究で扱うエスキシェヒル・カラチャイ語のデータは、すべて母語話者から直接採集したものである。また、エスキシェヒル・カラチャイ語の音韻研究も始まったばかりであり、音素目録は完成に至っていない。このため、本研究では暫定的にトルコ語の表記を流用してエスキシェヒル・カラチャイ語を書き表す。このことが本研究の結論に影響をおよぼす恐れはない。

エスキシェヒル・カラチャイ語は、SOVの基本語順を持ち、述語は文末に来る。いわゆる名詞述語文は次の (1), (2) のようになる。データ中の語の意味は次のとおりである。

men 人称代名詞一人称単数、以下同様に、sen, ol はそれぞれ二人称、三人称、biz 人称代名詞一人称複数、siz, ıla はそれぞれ二人称複数、三人称複数、talebe「学生」、tüyül 否定を表す。そして、文末の -me, -se, -di, -biz, -siz, -dile が名詞述語文に現れる形式である。以下、-me, -se, -di, -biz, -siz, -dile をまとめて「-di 等の形式」と呼ぶことにする。

(1) 肯定

	単数	複数
I	Men talebeme.	Biz talebebiz.
II	Sen talabese.	Siz talebesiz.
III	Ol talebedi.	Ila talebedile.

(2) 否定

	単数	複数
I	Men talebe tüyülme.	Biz talebe tüyülbüz.
II	Sen talebe tüyülse.	Siz talebe tüyülsüz.
III	Ol talebe tüyüldü.	Ila talebe tüyüldüle.

このように、人称と数によって異なる形式をとる。

3. さらなるデータと分析

本章では、前の章で見たデータをもとに、さらにデータを加え、エスキシエヒルカラチャイ語の名詞述語文を分析する。

3.1 分析の枠組み

本研究では、分析の枠組みとして主辞駆動句構造文法 (Head-driven Phrase Structure Grammar HPSG)_[2]を用いる。この枠組みにもとづき、文の認可について、語彙項目、規則、原理を満たすときに認可される、と考える。本研究では、先行研究[2]にならい、規則として、主辞-補語規則(Head-Complement Rule)、主辞-指定部規則(Head-Specifier Rule)、原理として、主辞素性原理(Head Feature Principle)、

を前提としている。また、S を VP の投射と考える。

3.2 肯定文

肯定文を見ると、文末の-di 等の形式が主語と一致する。主語と一致しない場合当然のことながら非文となる。

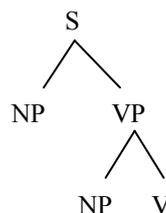
(3) * Ol talebe·se.

彼 学生·se

(4) * Men talebe·di.

私 学生·di

このことなどから、エスキシエヒル・カラチャイ語の名詞述語文は、S → NP VP と分析できると仮定する。構造を示すと次のようになる。



この分析が適当であるか検証する。句構造文法における重要な考え方の一つに、構成素をなす、という考え方がある。すなわち、構成素が単位ということであり、構成素をなしていれば、構成素を単位に他のものとの置き換えが可能である。VP の部分を名詞述語ではない VP である küldü「笑った」と置き換え、容認性を確認する。

(5) Sapar talebe·di.

サパル(人名) 学生·di 「サパルは学生だ。」

(6) Sapar küldü.

サパル(人名) 笑った 「サパルが笑った。」

他の VP との置き換えが可能のため、VP を構成していると考えられることができる。VP を構成してるため、その主辞は V であることになり、この場合、「-di 等の形式」は英語における be 動詞のような、いわゆるコンピュータである

と考えられ、以下、「-di 等の形式」のことをコピュラとも呼ぶことにする。

次に、コピュラの語彙項目を記述する。語彙項目は、例えば 2 人称単数の -se であれば基本的には次のようになる。

[ARG-ST [NP[2sg], NP]]

これは、指定部に主語 NP、補部に述語 NP をとることを意味する。

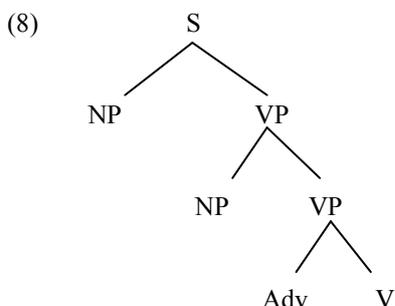
3.3 否定文

2 章で見たように否定文は *tüyül* を用い、(7) のようになる。

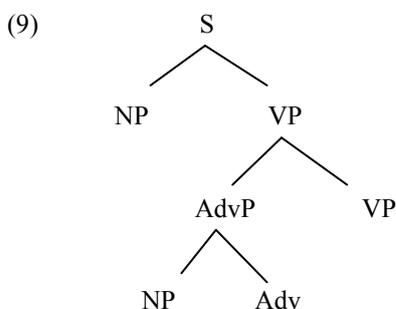
(7) *Sapar talebe tüyül·dü.*

サパル 学生 *tüyül·dü* 「サパルは学生ではない。」

肯定文に否定を表す *tüyül* が加わったものということができる。なお、-*dü* と -*di* は母音調和による異形態で、同じものである。否定文の構造を考えた場合、分析可能性は少なくとも 2 通りある。ひとつは、(8) のような構造を持つものである。なお、*tüyül* の範疇を Adv と仮定している。



もうひとつは、(9) のような構造のものである。



どちらが適当であるかを考えなければならない。ここで、ふたたび構成素をなすかどうか

を見る。構成素をなしていれば構成素単位で語順の入れ替えの可能性がある。そこで、倒置文の容認を検証する。

(10) a. *Talebe tüyüldü, Sapar.*

b. ? *Tüyüldü talebe, Sapar*

c. ? *Sapar, tüyüldü talebe.*

d. ? *Tüyüldü Sapar, talebe.*

e. * *Hasan tüyül talebedi.*

f. * *Tüyül Hasan talebedi.*

以上のように、*tüyül* と -*di* が離れているものは容認されないことから、*tüyüldü* が構成素をなす、すなわち、(8) の構造が適当であることが明らかになった。

次に、*tüyül* の語彙項目を考える。*tüyül* は、あれば名詞述語文を否定の意味を付け加えるだけの、文あるいは動詞にとって必須の存在ではない。人称・数等の情報も持っていない。これらのことから、本研究では、動詞の項ではなくて付加語であるという分析を行う。ただし、現れる環境に制限があり、コピュラではない一般的な動詞とは共起しない。動詞には独自の否定形が存在する。

(11) **Sapar tüyül küldü.*

(12) *Sapar kül·me·di.*

サパル 笑・否定・過去 「サパルは笑わなかった。」

4. 他のチュルク語のデータ

以下、以上の分析が他のチュルク語、具体的にはトルコ語とウイグル語、には適用できない、すなわちそれらの言語とエスキシエヒル・カラチャイ語は異なる構造を持つことをデータをあげながら示す。

4.1 トルコ語

2 章でみたように、エスキシエヒルカラチャイ語の名詞述語文は、文末に(1)に示した形式をとる。ところが、トルコ語ではこれとは異なった形式をとる。*öğrenci* 「学生」

	単数	複数
I	Ben öğrenciyim.	Biz öğrenciyiz.
II	Sen öğrencisin	Siz öğrencisiniz.
III	O öğrenci.	Onlar öğrenci.

エスキシェヒル・カラチャイ語では、文末の形式は義務的である。ところがトルコ語では3人称ではそうではない。

エスキシェヒル・カラチャイ語

(13) Ol talebedi.

(14) * Ol talebe.

トルコ語

(15) O öğrenci.

彼 学生「彼は学生だ。」

このことから、エスキシェヒル・カラチャイ語とトルコ語では3人称名詞述語文の構造が異なる可能性がある。すなわち、カラチャイ語では、S → NP VP と分析できていたものが、トルコ語においてはVPに相当するものが存在しないため、この分析は適用できない。ただし、トルコ語では三人称以外は文末に何らかの形式をとまなうので、それらに限ってはエスキシェヒル・カラチャイ語と同じ分析が適用できる可能性もある。しかしながら、そうした場合、人称ごとに別の分析をするということになり、問題が残る。

次にウイグル語の例を見る。

4.2 ウイグル語

	単数	複数
I	Men oqughuchi.	Biz oqughuchi.
II	Siz oqughuchi	Siler oqughuchi.
III	U oqughuchi.	Ular oqughuchi.

oqughuchi 「学生」

トルコ語とは違い、ウイグル語では、1人称でも、直接、名詞で文が終わる。

(16) Men oqughuchi.

私 学生「私は学生です。」

このため、カラチャイ語の分析が全く適用で

きないことになる。ウイグル語とカラチャイ語は名詞述語文に関してかなり異なるということが出来る。

ここまですべてをまとめると、

エスキシェヒル・カラチャイ語：名詞述語文は文を成立させるために形式が必要。

トルコ語：人称を示す形式が必要。人称を示す形式がないものは3人称である。

ウイグル語：形式の必要なし。

類型

名詞述語文についてVP分析が

可能な言語：エスキシェヒル・カラチャイ語

不可能な言語：トルコ語 ウイグル語

5. 結論

エスキシェヒル・カラチャイ語の名詞述語文を記述した。

エスキシェヒル・カラチャイ語の名詞述語文は、-me, -se, -di等の形式を文末に置くことが必須であり、これら -me, -se, -di等の形式は、コンピュータとして分析できる。チュルク諸語の中での位置づけという観点からは、トルコ語ともウイグルとも異なった特徴を示し、それらの言語のものとは異なるタイプの名詞述語文であるということが出来る。

参考文献

- [1] Erdoğan, Boz and Semra Günay Aktaş (2016) Diasporada Karaçay Türkçesinin kullanımı Eskişehir Örneği. *Uluslararası Türkçe Edebiyat Kültür Eğitim Dergisi* 5(1): 145-155.
- [2] Sag I. A. & Wasow T. (1999). *Syntactic Theory: A Formal Introduction*. CSLI.